下山大工松木輝殷の設計技法に関する研究
－身延山久遠寺三門を対象にして－

K02035　菅野　麻里

Ⅰ．研究目的・方法

Ⅰ-1研究目的

江戸時代初期、大工頭や大棟梁の職が世襲制となり、その権限の裏付けとなるように木割の秘伝である木割書が各地の工匠達によって多数作られたが、次第に設計のマニュアル書へとその位置を変えていく事となった。それにより、誰にでも寺社等の設計が可能になった反面、画一的な作品しか作られなくなってしまった面もあるとされている。

しかし、実際に建築物は現存するものの、当時の設計者の意図を示す史料は少なく、設計手法も解明されるに至っていない点が多い。

そこで本研究では一部史料が残っている下山大工松木輝殷の作品である久遠寺三門を調査対象とし、実測調査に基づく各部の木割を把握、さらに木割書との比較をすることによってその設計の詳細を明らかにすることを目的とする。

Ⅰ－2研究方法

①『匠明』門記集より「五間山門之図」、江戸建仁寺流系本『諸堂社絵図』より「五間山門」を読み解き、木割シートを作成する。

②身延山久遠寺山門を実測調査する。(2005 年８月)

③調査で得たデータと作成した木割シートとの数値の比較を行い、輝殷が参考にしていたと考えられる雛形を推定する。

④③で推定した雛形に基づいて三次元 CAD で復元し、久遠寺三門と詳細を比較・考察をすると共に、各年代の他の三門とも比較することにより、松木輝殷の設計技法について検証する。

Ⅱ．下山大工について

Ⅱ-1下山大工について

下山大工とは甲斐国(現在の山梨)の身延町下山を拠点とし、江戸時代から明治初期にかけて各地で活躍した大工集団のことである。

Ⅱ－2松木輝殷について

輝殷は下山大工松木運四郎の子として 1843 年（天保 14 年）に生まれ、洋風建築や学校・寺社・彫刻と広い分野のものを手がけて活躍していた人物である。

表１.松木輝殷略年譜

年代	事項
1843年(天保14年)	・松木運四郎の次男として生まれる
1870年～	・学校の設計に携わる
1880年～	・引き続き学校の設計に携わる ・寺の本堂、橋、病院を手掛ける
1890年～	・この頃から幅広い分野のものを手掛けはじめる (寺社建築・役場・彫刻・学校など) ・設計の相談を受け始める
1900年～	・寺社建築・彫刻を中心に手掛ける

図１．旧睦沢小学校正面写真

多数の作品を手掛けた中でも 1875 年（明治８年）に設計した旧睦沢(むつさわ)小学校は国の重要文化財に指定されているほどの作品となっている。

輝殷の職場は年譜によると、自身の出身地でもある南巨摩郡を中心に東八代郡・東山梨郡を主な職場とし、年を経るにつれて職域は広がっていった。

Ⅲ．木割書について

木割とは我が国の伝統的な建築において各部の比例と大きさを決定するシステム、または原理の事であり、「木砕き」とも言う。早くから体系化・整備された木割書として扱われていたのが、二大流派を形成していた平内家・四天王寺流の『匠明』と甲良家・建仁寺流の『建仁寺流家伝書』である。どちらも枝割によって算出される柱の太さを基に細部まで数値表記がされている。

指導教員　伊藤　洋子　教授

Ⅳ．身延山久遠寺について

Ⅳ－１久遠寺について

久遠寺は山梨県身延山の中腹に建つ日蓮宗総本山である。日蓮聖人が 1274 年(文永 11 年)に三間四面の草庵を構えた時に始まり、1475 年(文明7年)に移転事業が行われた。その後何度か災害に遭いながらも復興・発展し、現在の姿となる。

現在建つ三門も 1865 年(慶応元年)・1887(明治 20 年)の２度の火災によって焼失し、1907 年(明治 40 年)に再建されたものである。

久遠寺にはもともと匠家池上氏が一貫して職作権を有していたが、3度目の三門建設の際には絵図より、池上亀之丈を棟梁とし、輝殷は脇大工として設計に関わった。

しかし、実質的には輝殷の設計作品であると考えられている。

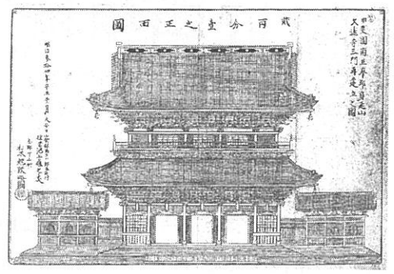

図２．身延山三門絵図

Ⅳ－２三門について

三門とは三解脱門の略であり、悟りの境地に至るための空・無想・無願の三つの解脱門のことで、寺院内苑を涅槃の境として、仏道修行によって涅槃に入ることを意味したものである。

形式は五間三戸の二重門の左右に寺院構成の中心である金堂・講堂と三門とを結ぶ回廊の名残と思われている山廊を設けたものが正式な形式とされ、久遠寺三門もこの形式に当てはまる。

久遠寺三門の二層部に昇る階段は山廊からかけられていて、門は総ケヤキ造、屋根は入母屋造の瓦型銅板葺きとなっている。

また、初層脇間には仁王像、二層には十六羅漢が祀られている。

Ⅳ-3実測値と木割書の比較

柱の太さ等につき『匠明』門記集より「五間山門之図」・『諸堂社絵図』より「五間山門」のどちらにも記載されている項目を拾い上げて実測値と比較すると、以下の事が把握出来る。

- 組物の取り方は初層は建仁寺流と実測値の一致がみられ、二層は二流派と実測値の一致が見られる。逆に縁下組物については二流派同士では一致しているが、実測値とは一致しない。
- 中間の取り方は二つの流派とも同じ数値で決めているが、実測値とは一致しない。
- 柱の太さは実測値が最も細く、次いで建仁寺流、四天王寺流の順に太くなっている。他の部材についても同じ傾向がある。
- 初層内法高さ、屋根勾配は建仁寺流に近似している。
- 組物の一部の部材、縁広さの実測値は四天王寺流の方に近似している。
- 初層柱の太さに対する柱高さの比率は実測値が最も大きく、これに近似した値を持つのは建仁寺流の方であるが、逆に二層では実測値が最も小さい。

以上の点より、久遠寺三門は四天王寺流よりも建仁寺流の方に近い数値をとっていると言える。

表2. 『匠明』門記集　五間山門之図・『諸堂社絵図』 五間山門と久遠寺三門の実測値の比較

	名称	寸法記号	『匠明』門記集　五間山門之図			対象建築名：久遠寺　三門 実測値			『諸堂社絵図』 五間山門		
			木割	寸法	備考	寸法	枝割	備考	木割	寸法	備考
1	中間	L	L	19尺=24枝		5030	22.8枝		Lo	24枝	
2	柱太さ	a_1	a_1=0.13L	3.12枝		580	2.64枝		0.12Lo	2.88枝	
3	腰柱	a_2	a_2=0.11L	2.64枝		480	2.18枝		—		
4	内法(大輪下部まで)		L+a_1	27.12枝		6250	28.4枝		3.5あいた=0.5a	28枝	1あいた=8枝
5	柱貫成		0.8la_1	2.496枝		360	1.64枝		0.8a_1	2.3枝	
	飛貫と柱貫の間		a_1	3.12枝		930	4.23枝		a_1	2.88枝	
	飛貫成		0.6a_1	1.872枝		579	2.63枝		0.6a_1	1.73枝	
	腰貫成		0.6a_1	1.872枝		305	1.386枝		0.6a_1	1.73枝	
6	扉				引貫に吊る			なし	—		
7	大輪厚さ				肘木成と同じ	200	0.9枝	肘木成=200=0.9枝	0.3a	0.86枝	
8	下部接物				二手先			三手先			三手先
9	槍			8枝、5枝						7枝、5枝	
10	腰柱高さ(大輪上部まで)				上層隅の間と同じ	2650	12枝	隅の間:3180=14枝	1/2-3.5あいた	14枝	大輪下部まで
11	腰柱位置				下柱芯から2枝内側	—			—		
12	縁組物				地覆＋大斗＋縁葛			地覆＋出三斗＋縁葛			地覆＋大斗＋縁葛
13	縁広さ				隅の間の1/2	1600	7.28枝	隅の間の1/2:1590=7.2枝		8枝	組み物1あいた
14	上部組物				三手先、二重尾垂木			三手先、二重尾垂木			三手先、二重尾垂木
15	槍			7枝、5枝	扇垂木を用いる		—	扇垂木			扇垂木
16	茅負反り(下)				木の成1本分	—			—		
17	(上)				1.5a_2分	—			—		
18	野屋根勾配(下)			4寸5分勾配		30度	5寸8分			4寸8分	
19	(上)			7寸5分勾配		35度	7寸			7寸8分	
20	破風位置				丸桁外側と合わせる	—			—		
21	山廊桁行		1.5L	36枝		8750	39.8枝		2Lo	48枝	
22	梁行		L	24枝		4980	22.6枝		Lo	24枝	
23	柱太さ	a_3	0.7a_1	2.184枝	大輪、柱貫、引貫、腰貫	340	1.55枝		0.7a	2.01枝	
24	柱上部組物				三斗組			三斗組			三斗組

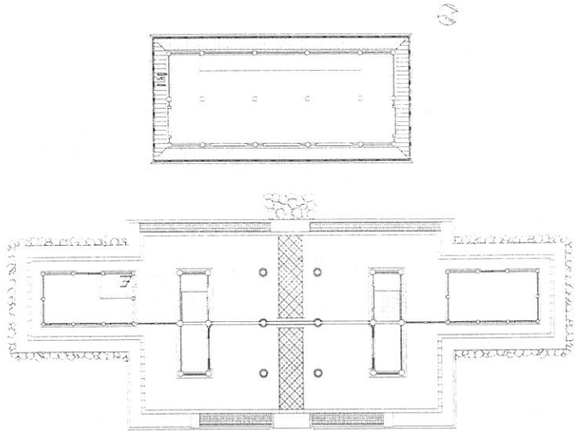

図3．三門1階平面図（下）　図4．2階平面図（上）

図5．久遠寺三門正面写真（左）　図6．初層組物写真（右）

この結果を基に建仁寺流の木割にそって復元したものとさらに詳しく比較してみる。

まず、初層において見られる相違点は、久遠寺の方には飛貫がなく、虹梁・太瓶束が入っている点である。また、建仁寺流の方には柱貫に禅宗様の木鼻が付けられているが、久遠寺の方には見受けられない。

逆に組物に関しては、建仁寺流には各組物に１つしか拳鼻が付けられていないが、久遠寺の方には各段についている。

両方とも同じであった点は、天井が鏡天井である点と垂木の架け方が６枝割の制を守っている点であった。

二層において見られる相違点は、高欄の飾りが久遠寺の方は擬宝珠だが、建仁寺流の方は逆蓮である点である。建仁寺流は初層と同じように頭貫、大輪と配置されているのに対して、久遠寺の方は頭貫と大輪が離れて配置されているのも相違点としてあげられる。また、天井が建仁寺流は初層と同じように鏡天井であるが、久遠寺の方は竿縁天井と違いがある。

組物・垂木の架け方に関しては一致していることが分かる。

以上の点より、久遠寺三門は木割書と比較すると柱が細いにも関わらず高さがあるため、すっきりした立面を持っているが、おおよそは指示に従って設計されたものであると言える。しかし、木鼻などの装飾部では差が出る為、この点は松木輝殷独自の設計技法によるものであると言っていいだろう。

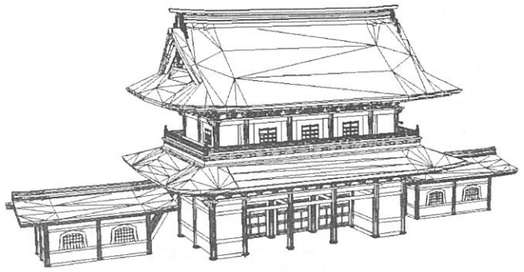

図7．江戸建仁寺流系本『諸堂社絵図』「五間山門」復元透視図

Ⅳ－４実測値と他の山門との比較

Ⅳ－３までで判明した点を踏まえて久遠寺と他に現存する五間三戸の門と比較をし、実際にどのような差があるかを検証する。ただし、ここでの比較対象の三門は建立年代に差を出し、山門の変遷を辿れるように抽出したものである。

比較対象とする門は大徳寺・知恩院・増上寺・専修寺・光明寺・法華経寺・池上本門寺である。

このうち、山廊付きの門は大徳寺・知恩院・増上寺のみであり、また、初層に扉を持つ門は法華経寺・池上本門寺以外全ての門にある。久遠寺は山廊は付いているが、扉は付いていない。

久遠寺や、比較対象とする門のほとんどは梁間が二間のものだが、増上寺・光明寺は梁間が三間ある珍しい平面を構成している。

これら比較対象とする門と久遠寺を現在建っているものの建立年代順に並べて検証してみて判明した点は、以下の通りである。

・　平面自体の規模について明確につかめるものはなかったが、平面の規模に対する屋根の高さの割合は時代を経るにつれて大きくなっていっている。これは山廊部にも同じ事が言える。

・軒下の組物は初層が二手先、二層が三手のケースが多くどちらの層も三手先を備えるものは近代のものによく見られる。久遠寺もその流れにあてはまるが、二層とも三手先、さらに二層では二重尾垂木を採用している点では比較的珍しいケースである。

・久遠寺の初層組物には全ての段の肘木に拳鼻がつけられていたが、他の山門にはそれが見受けられなかったため、独自の装飾と考えられる。

以上の３点が判明したが、ここでさらに久遠寺とほぼ同時期に建てられた小室山妙法寺との比較をしてみると、組物・平面は久遠寺と妙法寺の両方とも同じであるが、妙法寺の山門には唐破風がついていたり、高欄の飾りが四隅以外にもついていたり、木鼻の彫刻が禅宗様のものと違っていたり、と装飾に関して他の山門には見受けられない部分がある。

このことから、久遠寺三門は時代の流れに沿った規模で基本の形を逸脱しない範囲での設計・装飾がされたと言える。

表3．山門リスト

名称	大徳寺		知恩院		増上寺		専修寺	
建立年代	1589（天正17年）		1621（元和7年）		1622年（元和8年）		1704年（宝禄元年）	
所在地	京都府京都市		京都府京都市		東京都港区		三重県津市	
平面規模（初層）	山門	16713×8157	山門	26549×12276	山門	20710×9510	山門	17733×6852
	山廊	3939×3636	山廊	6363×4848	山廊	4920×9735	山廊	×
軒高	山門	初層：5342 ｜二層：11620	山門	初層：8326 ｜二層：15801	山門	初層：7270 ｜ 二層：×	山門	初層：5182 ｜二層：10.167
	山廊	3709	山廊	4530	山廊	4305	山廊	×
棟高	山門	17044	山門	23846	山門	―	山門	15.758
	山廊	5818	山廊	7878	山廊	―	山廊	×
組物	山門初層	二手先	山門初層	二手先	山門初層	二手先	山門初層	三手先（大仏様）
	二層	三手先（尾垂木1本）	二層	三手先（二重尾垂木）	二層	三手先（二重尾垂木）	二層	三手先

名称	光明寺		久遠寺		法華経寺		池上本門寺	
建立年代	1847年（弘化4年）		1907年（明治40年）		1926年（大正15年）		1977年（昭和52年）	
所在地	神奈川県鎌倉市		山梨県身延町		千葉県市川市		東京都大田区	
平面規模（初層）	山門	15620×7240	山門	21580×9740	山門	14425×5040	山門	16350×6430
	山廊	×	山廊	6570×4870	山廊	×	山廊	×
軒高	山門	初層：5450 ｜ 二層：―	山門	初層：8312 ｜ 二層：―	山門	初層：5885 ｜ 二層：―	山門	初層：6620 ｜ 二層：―
	山廊	×	山廊	4085	山廊	×	山廊	×
棟高	山門	―	山門	―	山門	―	山門	―
	山廊	×	山廊	―	山廊	×	山廊	×
組物	山門初層	三手先（尾垂木なし）	山門初層	三手先（尾垂木なし）	山門初層	二手先	山門初層	三手先（尾垂木なし）
	二層	三手先（二重尾垂木）	二層	三手先（二重尾垂木）	二層	三手先（尾垂木1本）	二層	三手先（尾垂木1本）

※増上寺・光明寺は梁間三間の門

図8．小室山妙法寺山門正面写真

Ⅴ．まとめ

久遠寺三門は輝殷にとって生涯の中でもっとも巨大な寺社建築であり、一大プロジェクトであった。廃仏毀釈の運動が落ち着いて伝統的建築の復興がなされ、また、洋風建築の技術を積極的に取り入れる流れのあった当時、輝殷は設計のマニュアル書であった木割書の指示に沿い、それに大きく外れる事のない昔ながらの形のものを設計したと考えられる。

しかし、装飾の部分に関しては得意分野である彫刻をより生かすために、本来の指示とは違いつつも逸脱しない範囲で独自のデザインでもって仕事に当たったことがうかがい知れる。

参考文献

「匠明」　太田博太郎監修　鹿島出版会出版　1971年

「日本建築古典業書第三巻」河田克博著　大龍堂書店出版　1988年

「身延山久遠寺史研究」林是普著　平楽寺書店出版　1994年

「重要文化財大徳寺山門修理報告書」京都府教育委員会　1971年

「三重県指定有形文化財専修寺山門・津市指定有形文化材専修寺鐘楼堂保存修理報告書」

文化財建造物保存技術協会著　高田派本山専修寺出版 1997年

「重要文化財知恩院山門修理工事報告書」

京都府教育庁指導部文化財保護課編　京都府教育委員会出版　1992年

「下山大工史資料」　加藤為夫著　加藤美代子出版　2004年